
席官の話（仮）

カルチャー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

席官の話（仮）

【Nコード】

N6216U

【作者名】

カルチャー

【あらすじ】

護廷十三隊三番隊に所属する席官の緩い話

その1（前書き）

習作でございます

とりあえずくどく書くテスト

その1

今年で死神生活50年を過ぎるが、未だに慣れない事がある。

なんで自分が所属している隊舎の席官は座椅子なのだろうか？と、どうでもいいことに悩み始めて20年位になるだろうか。

隊長室には、椅子もソファもあるのに何故にと。

ちまちまとした細かい事に悩む自分の性格に、多少鬱屈をおぼえるが、

それもまた自分だろうとか考えて自己満足していると

「加賀清光9席えーしこーに、茶入っとうからこっちにけー」

快活な声が聞こえ、どうでもいい思考から、そちらに視線を上げると声に似合った容姿をした女性が手招きをしていた。

射場千鉄、それが彼女の名前である。

「射場副隊長ご苦労様です。休憩時間には多少早いような気がしますが？」

多少とゆうか、就業時間始まってまだ一刻もたっていなかったりするのだが、

目上の人物には強く出れない性格を自認しているため、目線で非難を現すことにした。

まあ自分ではわからないが

「えーがの、えーがのたまには部下をいたわんといけんからの」

こちらの気持ちが解っているのか、解っていないのか微妙に判断のつかない副隊長の言動に迷うが、

まあ、射場副隊長だしと納得する事にした。

目の前にいる副隊長様は、隊長すらも蹴ったり叩いたりするそれを最初に見た時は、啞然とした記憶がある。

「しかし射場副隊長、自分を誘うとは珍しいですね」
いつもは女性死神を誘うのだ。

私はシャイである、例えば目の前で落とし物をした人に落とし物を拾ったのに、声をかけるのを躊躇うほどの

「まいたんび、いつもの面子じゃ、変わり映えしのうしの」

そんな私の返答に聞いているのか聞いてないのか解らない、曖昧な返しをし、粗雑に歩きながら部屋に入りある場所に一直線で向かう。どうやら、部屋の隅で寝ている人物に注意が移ったようである。

やはり、私は存在感ないんだろうかと悩みに入ろうかと思案に入りそうになるところに

「おまえっさん、まいたんびまいたんび、見回りにこないと寝とんのう、いいみぶんだの」

そんな言葉が終わるか、終わらないかの瞬間にそこで寝転んでいる人物を踏み抜く射場副隊長

踏み抜かれた人物は悶絶し言葉もはっせなそうである。

「いちいき、いちいき、くどくと言いたくないがのやいとーすえるで！」

凄みの聞いた声で悶絶している人物を引きずり部屋を出て行く射場副隊長

やはり私は空気なのだろうか

そんな引きずられていった

斎藤五席がこの緩い物語の主人公である

こっちに来た時の話（前書き）

説明その1

こっちに來た時の話

生前の事を覚えていない

これは流魂街出身の死神だとたまに居るとのことだ。
まあ、そんなたまに居る死神になってしまったのが自分だ。

『斎藤』それが自分の名字である。

幸いと言うべきか、名字だけは覚えていた。

その名字だけをもって何故か、長い列の最後尾に並んで立っていたらしい。

いろいろあつて五番街の家で、どうやらしばらく無気力に過ごしていたらしい。

らしいという言葉が多いのは、記憶に無いからだったりする。
ほとんど動かず、まるで石のようだったとのこと

まあ、こんな自分の最初の記憶は腹が空いたである。
どうやら人間腹が空けば、覚醒するらしい。

脱け殻状態と言うべきか、そんな様をしていた自分に世話を焼いて
いてくれた家族には頭が下がる。

家族といっても血の繋がりは無い、同じ家に住んでいるそれだけだ。
そんな関係だが、血の繋がった家族よりも家族らしいと自分は思っている。

まあそれはさておき、腹が空くである。

どうやら普通は腹が空かないとのこと
腹が空く奴は、霊力があるらしいとのこと
これは家族に聞いた話から判断するとだが

腹が空いては飯を食っちゃね食っちゃねして、大体10年過ごした
だろうか

流石に飽きがきていたのである

確かに家族と過ごすのは良い、だが情性だ。

まあそんなこんなで、たいした理由もなく強いて言えば退屈凌ぎの
為に真央霊術院の試験を受けたのであったが、
普通に試験に落ちた

ドベから数えたほうが早い順位だったらしい
努力もせずに受かる筈もないのは解っているが、
死ぬほど悔しかった。死んでるけど

それから一心不乱に勉強したね、飯の時以外
それが功を奏したのか次は、上から数えたほうが早い順位で合格で
きた。

一番で無いのは地味に悔しかったが

まあ晴れて死神候補になったのである

入院式での話（前書き）

説明 2

入院式での話

真央霊術院は死神を育成する機関である。

約1800年前に、『護廷十三隊一番隊隊長』兼『護廷十三隊総隊長』山本元柳斎重國が創設した人物である。

まあそんな偉大な人物が、この真央霊術院の入院式において式辞を行うのが通例だそうだ。

山本総隊長が式辞の為に前に出たら空気が変わったというのだろうか、彼を中心に圧力が拡がる

「ふむ、儂が護廷十三隊一番隊隊長山本元柳斎重國である」

ピンと空気が張り詰めた。声に力が乗るといえるのはこうだろうかと認識する。

「諸君は、死神になる門を叩いた。それは理解できるな、しかしまだ一歩である。

これからも精進をし切磋琢磨し入隊できるように励むように」

これが山本総隊長からの式辞であった。

彼の言葉は短いが重みがあった。彼自身から出る圧力と相俟って入学式に出た死神候補生には忘れられない式辞であったことは間違いない

山本総隊長の式辞もあつてかその後の式は粛々と進められていく

「新死神候補生代表前へ」

基本この宣誓は貴族がやるのが通例だそうだ。

しかし、今年は流魂街出身の死神が宣誓をするそうだ。

貴族が宣誓するのが通例になつてるのは、彼ら貴族が入院にあたりそれだけの勉強及び修練を積んで臨んでいるからである。

通例とはいえ彼らが優秀であることは確実である。
流魂街出身の死神候補生がやるのは異例だ。

なぜ流魂街出身の死神候補生が、宣誓を行うのか
それはその死神候補生がもつ刀に集約される

『斬魄刀』死神が持つ特殊な刀。死神自身の魂から形作られる刀である

自分自身の斬魄刀さえ持っていれば、護廷十三隊に配属される。
それほどまでに自分自身の斬魄刀とは重視される。

まあ、将来を約束されたエリートな訳だが、どうやらここに居ないらしい。

何回も名前を呼ばれるのに前に出てこないことから考えると
そんな状況だから周りが、ざわつくのは仕方ないだろう

「すいま〜せん、おくれました〜」

緩いと言えはいいのだろうか、周り空気が弛緩する。いや毒気が抜けたか

扉から入ってきた人物がたぶん代表生なのだろう
その人物を見て青筋が浮かび上がっている教官や、溜め息を漏らしている教官をみればなんとなく察せる。

「え〜と、遅れましたすみません」

勢いよくお辞儀をする人物

神崎麻星それが彼女の名前だ

神崎麻星との話（前書き）

説明 3

書き方を変えるテスト

神崎麻星との話

神崎麻星かんだきまほし彼女は自分と同じ、流魂街五番地に住んでいる。

自分が丁度去年の真央霊術院の試験に落ちたところに、彼女はここに来た。

最初ここに彼女が来た頃は、皆に避けられていた。理由は、刀を持っていたからだ。

この皆は刀に恐怖を抱いているといってもいい、時代が時代なため、人間の時刀傷によって死んだ人が多い。

自分自身の死による心傷、これはどうしようもないだろう。死後の世界でも刀に恐怖を抱くのは当たり前だった。

そのせいか死神による見回りも、刀を見ると多少固まってしまっらしい。

そんな状況では彼女が避けられるのは仕方なかったのだろう。可哀想に思ったのだろうか、自分でもわからないが、なるべく彼女を見かけたら話かけるようになっていた。

話かけるようになって暫くたったある日、気になっていた刀について訊ねることにした。

何故刀を持っているのかと

彼女の返答は簡潔だった。

わからない、と

その一言を言うと整理するためか、暫く俯き黙考し
考えが、纏まったのかゆつくりと口を開いていた。

ここに来て気づいたら、刀を胸の前で両手で握り締めていたらしい
気味が悪いが、自分に何か関係のある物だったら、捨てるわけにも
いかず持っている。

それが、彼女が刀を持つ理由らしい。

何故彼女が刀を持っていたのか、気になり刀を貸してもらい眺めて
いると

なんとなく理解できた

どうやら普通の刀と違つと

刀から力を感じるのだ。

臆気ながらもこの刀が何か理解できたのは、去年受けた真央霊術院
の試験のお陰だろうか

『斬魄刀』たぶんこれがそうなのだろう

私は、自分の少ない語彙を集めて彼女に刀を返すついでに伝えた。

どうやら君は死神らしい、と

彼女は少し驚きながらも疑問に思った事を自分に聞いてきた。

死神とはなんですか、と

避けられていたとはいえ、そんなことも教えてもらっていないかったのかと

彼女には失礼だが大笑いした。

思えば死んでから、笑うことすら久しぶりであった。

それから自分も、彼女のもとに、足繁く通った。

彼女は『斬魄刀』を持っている。

死神達が彼女に気づいたら、間違いなく真央霊術院に入れられるだろう

それならば、一緒に勉強して来年受けないか？と提案したからだ。

後悔するわけではないが3ヶ月もすると、自分が彼女に教えてもらう立場になっていたのは滑稽だった。

あと2ヶ月もすれば、試験というところで彼女に相談を持ちかけられた。

最近同じ夢ばかり見る、と

これは『斬魄刀』による、呼び掛けなのではないか、と

生憎と自分は、『斬魄刀』を持っていないためわからないが、と前置きをし

ならば名前は聞いたのか？と質問を投げかける

聞けない、これが彼女の返答であった。

理由は、夢にでてくる『斬魄刀』から逃げている、とのこと

夢にでてくる『斬魄刀』を見ると、訳も解らず逃げ出しているらしい

彼女は、まだ私が『斬魄刀』に見合った実力を身につけていないせいで、私が逃げ出しているのでは、とそう言葉にし黙ってしまう

悩んだ末に、自分に相談したのだろう、落ち込む友人に返す言葉を吟味する

『斬魄刀』にしろ『君』にしろ、答えは君の中にしかない、悩むのなら悩むしかない、君自身の『斬魄刀』の名前は君にしか聞こえないだろう

聞けなくとも『斬魄刀』は君の手にあるのだゆっくり行けばいい、と恥ずかしい台詞を言ったためか、自身の顔が赤くなるのがわかる。

そんな私を見て気が抜けたのか、はにかむ彼女

うん、ゆっくり行くよ、と

実にいい笑顔である

珍しいことに真央霊術院試験3日前に、彼女から呼び出しをされる呼び出された場所に行くと彼女が『斬魄刀』を携え待っていた。

名前聞けたよ、と満面の笑みとともに嬉しい報告をしてくれた。

『始解』とは『斬魄刀』の名前を呼ぶことによって、形を換え本来の姿になること。

それを、自分に見せる為に呼んだとのこと、折角だ試験を受ける前の景気潰けの意味も込めて見せて貰おうか

わくわくしながら彼女の前に座る

特等席に座る自分を確認すると、彼女の口から解号が紡ぎ出された

「被い清めよ『六根』」

級友との話・壺

入院式からしばらくたち、自分の所属する組にも慣れはじめ、軽口を叩ける幾人かの友人もできた。

「斎藤、飯いこうぜ飯」

馴れ馴れしく肩に手を置き、昼食に誘ってくる男の手を軽く払いのけ、半眼で睨む。

「はいはい、わかったわかったから」

こんな態度になってしまうのは仕方ないだろう、なにせコイツは何かとくっ付きたがるのだ。

流魂街六二番地出身木檜猿渡ベタベタ触ってくる多少うざったいやつだ。
こぐれさわり

木檜とのろそろとだべりながら食堂に向かう、

「しかしよお、まさか袴貰えるとは思わんかったな」

木檜が話す内容は、大体決まっている。

授業、飯、服装についてだ。

どうやら今日の気分は服装らしい、そんな彼の話を適当に聞き流しながら食堂に着く、

昼食時の混雑にうんざりもするが、そうは言ってられない、貴重な休み時間なのだ。

速く食べて、少しでも休みたいのである。

「じゃあ、今日は俺席とつとくから、飯適当に宜しく」

慣れたもので役割分担もすんなりと決まる。

とりあえず聞こえていたので手を振る。

それを見て満足したのか、早速席確保に向かつていった。

「はい、これでいいだろ」

持っていた定食を片方、木檜の前に置く。

それを待っていましたといわんばかりに、頬張り咀嚼する。

それを見て、自分も席に座り昼食を頂くことにする。

「なあ、午後の授業って鬼道の実習らしいが……」

早食いが信条なのか、とにかく木檜が食べ終わるのは速い

私がまだ味噌汁に一口も手をつけてないのに、コイツは自分が食べ終わったら話をし始める。

「授業聞いているが全然わかんねえ」

頭を抱え、うなだれる木檜、まだ食べ終わっていないので無視することにする。

そんな彼の言葉に共感したらしい返事が私の後ろから響いてきた。

「ああ、それわかるわかる」

頭の後ろから聞こえてくる、くすぐられるような甘い声

首をそちらの方向へ向けると、級友の覇湯巴はゆはゆは由羽が立っていた。

彼女が手に昼食を持っているのを考えると、席を探しているのだろう。平椅子な為、私が横に少し動き、座れる場所を確保し座るように促す。

「ありがとうねえ」

隣に座り軽く感謝をする覇湯巴

彼女の揺れる髪から微かに花の匂いが漂ってくる。

匂いに釣られるように彼女の顔をみてしまう。

腰まで届きそうな長い黒髪に、

陶磁器みたいな白さとでもいえるのか、とにかく白い肌

そして、くrikurittとした綺麗な目と、彼女の容姿はかなり整っている。

そんな彼女だがあまり級友と話をしない、いやするにはするのだがオドオドと話されたり、気を使われながら話されたりと微妙だそう
だ。

理由としては彼女が下級とはいえ『貴族』だからだろう

覇湯巴由羽・壺

覇湯巴由羽はゆは彼女は下級貴族の末娘として生まれた。

彼女の上には、跡継ぎの兄、そして姉の二人がいた。

彼女が小さいころ、面倒を見てくれたのは長女であった。
年の離れた姉妹であったためか、長女は自分の稚児をあやすように、大切に由羽の面倒をみたという。

そして、由羽が立って歩けるようになるころには、由羽は次女に懐いていた。

長女が立てば由羽も立ち、長女が歩けば由羽も歩く。

周りから見れば仲の睦まじい良い姉妹であった。

そして、由羽が喋れるようになり、冬が明け春になるころに

突然、長女は嫁いでいった。

それ以来、長女とは一切連絡をとっていない。

突如居なくなつた長女、由羽は泣きに泣いた。

泣くのを、いつも困つたように微笑んであやしてくれた長女はもういない。

それでも彼女は待っていた。

由羽の中で、長女は柱であった。

いつも自分を支えてくれる柱であった。

いつもいつも見守ってくれる優しい存在だった。

いつもいつもいつも

だけでもういない。

そんな塞ぎ込む由羽を兄は暇を見つけては、ちょいちょい外に連れだしていた。

肩車をしたり、水飴を買ってくれたり

由羽を楽しませる為に彼は頑張った。

由羽の中で長女について蓋をし、兄の為に笑う事を思い出すのに、暫くは時間がかかったが

由羽は日常に戻っていた。

由羽の背が四尺七寸に届くころ、由羽に教育係がついた。

今まで自分に興味の無かった両親が、突如何かをしてくれることに由羽は訝しがったが

少なくとも自分自身のためになる

それが理解できたため、それ以上深く考えなかった。

やれ、礼儀作法が違う

やれ、髪の手入れがお粗末である

やれ、笑い方が汚い直せ

由羽の修正は多岐に渡った。
理不尽なことも多々あったが、
今まで自分に興味の無かった両親が、由羽にしてくれた初めての出来事であったため、
由羽はそれに耐えた。

たぶんこれが両親の愛情なのだろう、と

そんなある日、由羽は聞いてしまう
廊下を歩いて部屋に帰る途中、使用人たちが話してる内容を

彼女もそろそろだ、と

最初は意味がわからなかった。

何が？と

だが次に聞こえてくる言葉で、理解してしまった。

で、彼女はどこに、と

気づくと由羽は自分の部屋にいた。
自分は両親に愛されては、いなかった。
それは最初から、わかっていた。
最初そばにいたのは長女だった。
そして、次は兄だった。

ああ、思えば両親の顔なんて覚えていない

ああ、顔どころか、声すら覚えてない

ああ、自分と両親との関係は、なんなのだろうか？

鏡に映る自分の顔もどこか滑稽だ。

笑っているような笑っていないような

実に中途半端だ。

ただ、なんとなくだが、この表情に覚えがある。

いったい、なんだったのだろうか

遠くに覚える、次女の顔

彼女もこんな表情をしていたな……

秋の季節、長女に連れられでた一面ススキに囲まれた場所で、

彼女は鏡に映った自分と、同じような表情をしていたな

彼女はどいう心境だったのだろうか

自分と同様に、両親への呆れだったのだろうか

それとも、自分と別れる寂しさだったのだろうか

わからない、わからないが鏡に映る自分に吐き気がした。

空っぽだ。

自分にあるのは諦め

空っぽだ。

自分は人形

空っぽだ。

自分は空っぽだ。

無気力でも体は動くものだ。

教育係の小言を聞きながら、自分の意志とは関係なく動いてしまう。
自分に自己嫌悪しながら部屋に帰ると
そこには兄が居た。

一言二言、兄と会話をすると

それ以上会話は続かず、しばらく兄は黙りこんでしまう。

そんな状況が半刻ほどたっただろうか

何かを決心したかのように、兄はおもむろに
懷から取り出した何かを私の目の前においた
それは真央霊術院への案内状だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6216u/>

席官の話（仮）

2011年10月9日09時43分発行